

令和6年度 校内研究実施計画書

鈴鹿市立郡山小学校

1 研究主題及び教科

研究主題	考えを伝え合い、ともに学び合う子の育成 —表現する（話す・書く）ことが楽しいと思える授業づくりを通して—
教科・領域	国語科・算数科

2 主題設定の理由

自分の気持ちをうまく伝えられない、相手の気持ちを受け止めることができないという児童の実態があり、2015年度から国語科を切り口として「話す・聞く」を中心とする言語活動を大切にしたい授業づくりに取り組んできた。説明文教材における授業づくりに取り組んだ結果、筆者の考えをもとに自分の考えを広げようとする姿や筆者の説明の工夫を自分が発信するときに活用する姿が見られるようになってきた。2018年度からは物語文教材の授業づくりに取り組んだ。つけたい力を明確にした学習計画を立てることで、児童も指導者も見通しをもって学習に取り組むことができた。音読劇や解説文など、単元終末の活動に向かって主体的に学習に取り組む姿も見られた。一方、つけたい力に応じた言語活動が設定できているのか、作品ならではの面白さを実感できる授業づくりができているのかといった課題が残った。

2020年度からは学習指導要領改訂の趣旨を踏まえた授業づくりに取り組んだが、コロナ禍による交流活動減少の影響もあり、考えをもてない児童の姿や、考えを一方向的に伝えるだけの児童の姿もみられた。「主体的・対話的で深い学び」のある授業づくりに対する具体的なイメージがもてないという、指導者側の振り返りもあった。切り口となる視点を広げることで「主体的・対話的で深い学び」のある授業づくりのイメージがよりはっきりしてくるのでないかと考え、研修教科を増やすことにした。算数科の学習において「公式の意味を理解して使っていない」「図や式を使って説明することが苦手」などといった児童の実態があることを踏まえ、2022年度からは研修教科に算数科を加え、考えを伝え合い、ともに学びあう子の育成を目指した。

2023年度の研修では、単元のゴールを設定した学習、自分の思いを書く活動の習慣化、考えを共有するための端末活用など、一定の成果をおさめることができた。一方で、話し合い活動が意見をつなげる対話に発展しない、最後まで考えを言い切ることができない、表現する（話す・書く）機会が少ないなどといった課題が残った。そこで、2024年度は、表現する（話す・書く）活動の習慣化や表現する場の設定を工夫し、考えを伝え合う児童の育成を目指していく。

3 研究内容及び方法

めざす姿

「考えを伝え合い、ともに学び合う」を次のように捉える。

考えを伝え合う

伝え合うためには、自分の考えをもつことを大切にしなければならない。じっくり考えて自分の考えをもつことが伝えたいという気持ちにつながっていく。一方的に話したり聞いたりすることではなく、伝えたいという思いをもって話すこと。相手の考えを理解しようとして聞くこと。双方向の言語活動を通してお互いの考えを理解し合おうとすることである。

ともに学び合う

話し合いを通して自分の考えを広げたり深めたりすること。「考えを広げる」とは、一人では気づかなかったことに気づき、違った見方や考え方を知ることである。「考えを深める」とは、考えに確信をもったり、考えを揺さぶられたり、考えが変わったりすることである。

各学年の目指す姿を以下のように設定する。

考えをもつ	低	自分の考えをもつ。
	中	自分なりの理由をもって自分の考えをもつ。
	高	根拠や理由を明らかにして自分の考えをもつ。
伝え合う (話す) (聞く)	低	順序を考えながら話す。 大事なことを落とさないように聞く。
	中	筋道を立てて自分の考えを話す。 相手の伝えたいことに気をつけながら聞く。
	高	相手や目的に応じて自分の考えを分かりやすく話す。 相手の考えを理解しようとして聞く。
学び合う	低	友達の話聞いて自分の考えと比べる。
	中	自分の考えと比べながら聞いて、共通点や相違点に気づく。
	高	共通点や相違点を明らかにしながら、自分の考えを広げたり深めたりする。

具体的な取り組み

(1) 表現する（話す・書く）ことが楽しいと思える授業づくり

表現する（話す・書く）ことが楽しいと思えるように、児童の主体性を引き出し対話の必要性を感じさせたりするような授業づくりに取り組む。

主体的な学びを引き出す工夫

学ぶことに興味や関心をもち、自分の課題と学習内容との関連を意識して積極的に学ぶこと。

① 学習計画の共有

単元終了後にできるようになることを示し、児童と共に学習の見通しをもつ。

② 「考えてみたい」「解いてみたい」学習課題の設定

児童の疑問をもとにした学習課題や日常生活と関連がある学習課題を設定し、興味や関心を高める。

③ 振り返りの設定

分かったことやできるようになったことを書く習慣を身につけ、学びの自覚を促す。成長を認め「もっと考えたい」「調べたい」という意欲を高める。

対話的な学びを引き出す工夫

友達、教師、地域の人、作者、教材など相手と対話をするにより、自分の考えを広げること。

①「話し方名人」「聞き方名人」「パス語で話そう」の定着

聞こうとする雰囲気がある学級は安心して意見を言うことができる。低学年からの積み重ねを継続していく。

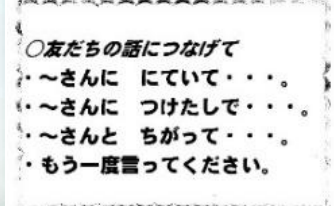
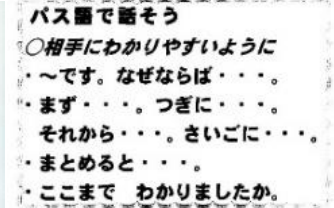
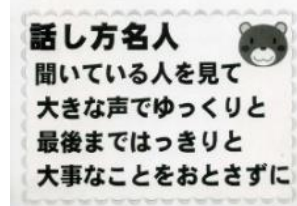
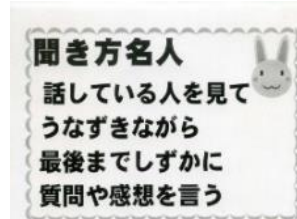
② 目的のある交流活動

「考えを確かめ合う」「考えを一つにまとめる」「考えを広げるために異なる考えの相手と交流する」など、目的に応じて話し合う人数や形態を工夫したり、ICT機器の効果的な活用場面を設定したりする。

学習したことを発信する場を設定する。他学年に調べたことを伝える、音読劇を地域の人に披露する、作品を掲示板（「まなびのひろば」）に展示するなどの方法が考えられる。発信する場を設定することで児童の「伝えたい」という意欲が高まる。

③ 考えのずれを生かす

「最初と最後の場面で登場人物の行動が違うのはなぜか」「この言葉があるのとないのでは印象がどのように変わるか」などと比較して考えたり、「どうして間違えたのか」「どうしたら正しくなるのか」などと誤答を生かして考えたりすることで理解をより確かなものにしていく。



(2) 日常的な学習指導の充実

① 基礎基本の定着

毎朝の郡山タイム（8時30分～8時45分）を活用し、既習事項の定着を図る。漢字の復習や計算問題、視写や作文などに取り組んでいる。全国学力・学習状況調査などの結果から漢字や算数の公式の定着に課題があることが分かっている。普段の授業では、熟語として漢字を捉える指導や、公式の意味を考える指導を継続していく。また、「読む・書くワークシート」や「よむYOMUワークシート」も活用する。

② 学習規律

指導のずれを無くすことで、児童の不安感の低減を図る。

【あいさつ】

「よい姿勢」「今から～を始めましょう」「これで～を終わりました」

【発言】

真っすぐ上に挙手。「はい」は言わない。名前を呼ばれたら「はい」と返事。名前は「さん」をつけて呼ぶ。

【机の上】

教科書は左、ノートは真ん中、筆箱を使う場合は上に置く。下敷きを使用する。

【ノート】

日付を記入する。必要に応じて「めあて」「まとめ」「ふりかえり」を記入する。学級に置いてあるカードを活用する。



③辞書引き

調べた言葉に線を引くなど辞書に触れる機会を低学年から取り入れている。国語科以外の学習でも辞書の活用を意識し、語彙力の向上を図る。

④図書に親しむための環境づくり

図書巡回指導員による授業支援を活用し、ワークスペースに学習課題に沿った図書を設置する。児童がいつでも手に取れる環境を整える。図書巡回指導員と連携を図り、図書室の整備も行っていく。また、郡山タイムの月曜日と金曜日を朝読書の時間に充てる。地域のボランティアや教師による読み聞かせを各学年定期的に行っている。